

厚生労働科学研究費補助金がん臨床研究事業「がん診療におけるチャイルドサポート」

平成 23～25 年度 総合研究報告書

癌患者の子どもへのチャイルドサポート介入調査

研究分担者 清藤佐知子 国立病院機構四国がんセンター 乳腺外科 医師

研究協力者 井上 実穂 国立病院機構四国がんセンター 臨床心理士

研究要旨

我々は、がん患者の子どもへのサポートの拡充のため、**I. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援、II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援、III. 地域への情報発信**、の大きく3つの側面から活動を展開してきた。

まず、**I. 医療者の支援**については、平成 23 年度に (1) がん専門病院である当院職員の認識と介入の現状調査を行い、医療者においてがんになった親をもつ子どもに対する関心は高く、子どもに対する心理的支援の必要性が認識されていることがわかった。また、その後の講演会開催時に行った (2) 一般医療者の認識と介入の現状調査では、来場者の 9 割以上が子どもへのサポートを必要と認識していた。前述の当院職員の現状調査では、医療者が子どもを支援するにあたり必要とするものとして、「医療者が勉強するための本や資料」、「知識やスキルに関する講義」を希望する割合が大きかったため、平成 25 年度には、(3) 医療関係者を対象としたがん医療における子どもに対する関わり方を学ぶ研修とワークショップを開催し、参加者の理解を深めることができた。

II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援については、平成 24 年度、平成 25 年度に、親をもつ子ども（小学生）に対する認知行動療法に基づく心理教育プログラムである「夏休みキッズ探検隊」を開催し、参加した子どもから高い評価を得、イベント介入前後の子どもストレスについても有意な軽減をみた。(p<0.05)

III. 地域への情報発信としては、市民公開講座を平成 23 年度（来場者 100 名）、平成 24 年度（142 名）、平成 25 年度（221 名）ともに開催し、地域住民ともに、がん患者（親）とその子どもに対する望まれるチャイルドサポートについてのあり方について考えてきた。年々来場者数は増加し、市民公開講座参加後にはもちろんだが、市民公開講座参加前でも子どもに病気について話す必要性について「必要ない」とする回答はみられなくなった。市民公開講座開催は、がんになった親をもつ子どもへのサポートに対する地域住民の認識を把握すること、および地域への情報発信に効果的であったと考えられた。

がん診療連携拠点病院として、今後も患者・家族および医療関係者、地域へのサポートの提供および情報発信を行い、院内、院外、地域が協働して、がんになった「親」をおよびその「子ども」を含む「家族」を支えるしくみ作りをさらに推進したい。

A. 研究目的

I. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援

現在の日本においては、がんになった親をもつ子どもに対するサポート体制は確立されておらず、問題の存在に気付いた者が職種に関わらず、がん患者の子どもをどのようにサポートするかをそれぞれの現場で模索しているのが現状である。したがって、サポートを必要としているがん患者およびその子どもに対する適切な支援の普及・推進のためには、医療関係者の認識の変容とがん医療の現場において応用できる実践モデルの確立が必須である。

また日本のがん対策において、がん診療連携拠点病院は地域のがん医療の質の向上と均てん化を推進するための重要な役割を担うと位置付けられている。したがって、がん診療連携拠点病院として、一般医療者のおよび地域住民に対しても親をもつ子どもに対する啓蒙活動を行い、今後のサポートの普及および質の向上を図る必要がある。

よって我々は、がん患者の子どもへのサポートの拡充のため、**I. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援、II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援、III. 地域への情報発信、**の大きく3つの側面から活動を展開した。

B. 研究方法

I. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援

(1) がん専門病院である当院職員のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査：平成23年10月医師、看護師、MSW、リハビリスタッフ（PT・OT・ST）、薬剤師、

栄養士を対象に自己記入式質問紙を各部署内にて配布・回収した。本調査において子どもは20歳未満と定義した。

(2) 一般医療関係者のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査：平成2年1月13日四国がんセンターで「がん医療におけるチャイルドケア～親ががん患者である子どものサポート～」と題して小児科医、臨床心理士より講演時、来場者（院内および院外より）に自己記入式質問紙を配布・回収した。

(3) 医療関係者を対象とした研修・ワークショップ「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」における参加者のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査：平成25年6月9日四国がんセンターにおいて、がん医療における子どもに対する関わり方についてのCLS、医師、臨床心理士から具体的な方法、技術の研修・ワークショップを実施し、その後に参加者に対して自己記入式質問紙を配布・回収した。

II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援

がんになった親をもつ子ども（小学生）に対する認知行動療法に基づく心理教育プログラム「夏休みキッズ探検隊」の開催とアンケート調査：(1) 平成24年8月7日および(2) 平成25年8月1日に四国がんセンターにおいて、がんになった親をもつ小学生の子ども（参加条件：当院患者の子どもであること（終末期、死別を除く）、子どもが親の病気を知っており参加を了解していること、研究に同意が得られていること）約10名を対象に、認知行動療法に基

づく心理教育プログラムを実施し、その後子どもと親に対して自己記入式質問紙を配布・回収した。

Ⅲ. 地域への情報発信

(1) 平成 24 年 1 月 14 日「子どものいのち親のいのち〜がん患者・家族を支える〜」と題して市民公開講座を開催し、小児科医、臨床心理士、認定遺伝カウンセラー、がん看護専門看護師、乳腺外科医師より講演後、シンポジウムを行った。(2) 平成 25 年 1 月 12 日「がん患者の子育て支援〜家族みんなの笑顔のために〜」と題して市民公開講座を開催し、乳腺外科医、臨床心理士、がん経験者、教育関係者、保健・福祉関係者等より講演後、シンポジウムを行った。(3) 平成 26 年 1 月 11 日「つながるいのち〜がん医療の現場から〜」と題して市民公開講座を開催し、映画『うまれる』の上映、小児科医の講演、がん経験者の対談、臨床心理士の講演を行った。(1)〜(3)において来場者に自己記入式質問紙を配布・回収した。

〈倫理面への配慮〉

I. およびⅢ. については、本調査への参加は個人の自由意思に基づくものとし、自己記入式質問紙調査は匿名で行い、記入済み回答用紙の管理には注意を払い、統計処理の後は直ちに廃棄した。

Ⅱ. については、今後も子どもおよび患者(親)のフォローアップが必要であるため、自己記入式質問紙調査は記名式とした。記入済み回答用紙は個人情報に留意して厳重に保管している。なお、イベント評価の必要性もあり、参加者募集の段階で、あらか

じめアンケート調査を行う旨をお知らせし、ご了承いただいた方が応募・参加された。

C. 研究結果

I. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援

(1) がん専門病院である当院職員のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査

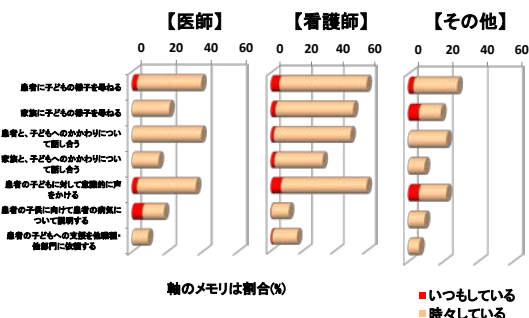
回収率は全体で 361/496 (72.8%) で、職種別みると医師:33/86(38.4%)、看護師:293/369(79.4%)、その他:32/41(78.0%)であった。

子どもの心理的支援に関する認識として、患者の子どもに関心が「ある」「とてもある」のは 319 (88.4%)、現在勤務している部署で過去 1 ヶ月に心理的支援が必要と思われる患者が 1 人以上いたとしたのは 168 (47.0%) であった。患者の子どもに対する心理的支援を「必要」「とても必要」としたのは 341 (94.4%) で、各時期別に「必要」「とても必要」としたのは、診断期:288 (79.8%) 慢性期:260 (72.0%)、再発・転移期:333 (92.2%)、終末期:345 (95.6%)、死別期:332 (92.0%) であった。子どもの年齢別に「必要」「とても必要」としたのは、0~3 歳:195 (54.0%)、4~未就学児:292 (80.9%)、小学校 1~3 年生:335 (92.8%)、小学校 4~6 年生:345 (95.6%)、中学生:346 (95.8%)、中卒以上:340 (84.2%) であった。

子どもに対する支援の実際(図 1)として、「時々している」「いつもしている」のは、患者に子どもの様子を尋ねる:219(60.7%)、家族に子どもの様子を尋ねる:166(46.0%)、患者と子どもへのかかわりについて話し合

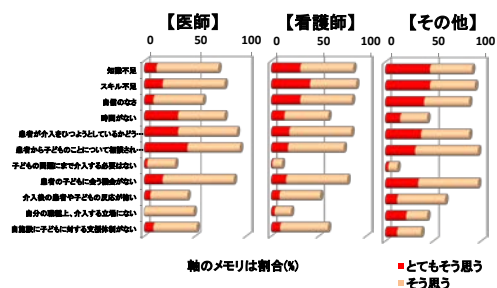
う：168 (46.5%)、家族と子どもへのかかわりについて話し合う：105 (29.1%)、患者の子どもに対して意識的に声をかける：214 (59.3%)、患者の子どもに向けて患者の病期について説明する：43 (11.9%)、患者の子どもへの支援を他部門・他職種に依頼する：53 (14.7%)であった。

(図1) 子どもに対する支援の実際
～四国がんセンター職員～



子どもの心理的支援するにあたりためらいや困難を感じる理由 (図2) として、「そう思う」「とてもそう思う」のは、知識不足：308 (85.3%)、スキル不足：320 (88.6%)、自信のなさ：298 (82.5%)、時間がない：218 (60.4%)、患者が介入を必要としているかどうかわからない：307 (85.0%)、患者から子どものことについて相談される機会がない：287 (79.5%)、子どもの問題にまで介入する必要はない：48 (13.3%)、患者の子どもに会う機会がない：296 (82.0%)、介入後の患者や子どもの反応が怖い：187 (51.8%)、自分の職種上、介入する立場にない：92 (25.5%)、自施設に子どもに対する支援体制がない：206 (57.1%)であった。

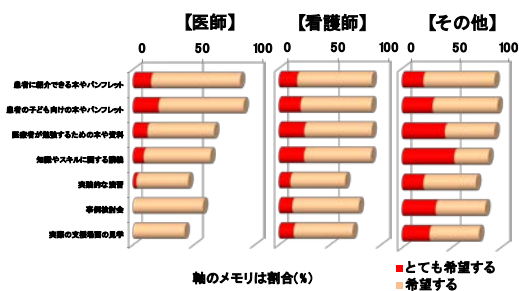
(図2) 子どもに対する心理的支援に
ためらいや困難を感じる理由
～四国がんセンター職員～



子どもを支援するにあたり希望するもの

(図3) として、「希望する」「とても希望する」のは、患者に紹介できる本やパンフレット：326 (90.3%)、子ども向けの本やパンフレット：327 (90.6%)、医療者が勉強するための本や資料：320 (88.6%)、知識やスキルに関する講義：315 (87.3%)、実践的な演習：231 (64.0%)、事例検討会：277 (76.7%)、実際の支援場面の見学：252 (69.8%)であった。

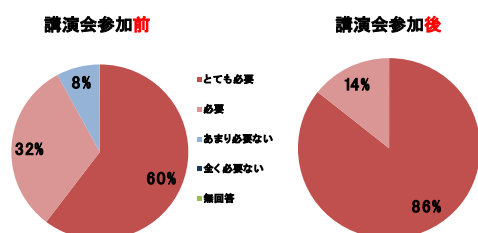
(図3) 子どもを支援するにあたり希望するもの
～四国がんセンター職員～



(2) 一般医療者のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査
回収率は全体で 63/92 (68.5%) であった。
講演会参加前後での意識の変化 (図4) としては、親ががん患者である子どもに対する医療者からのサポートについて、講演会

参加前では、とても必要：38（60％）、必要：20（32％）、あまり必要ない：5（8％）、全く必要ない：0（0％）であった。講演会参加後では、とても必要：54（86％）、必要：9（54％）、あまり必要ない・全く必要ない：各々0（0％）となった。

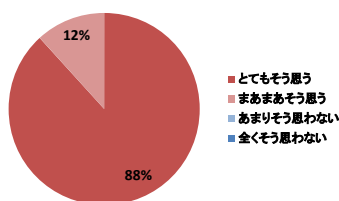
(図4) 親ががん患者である子どもについて、医療者からのサポートは必要と思いますか？
～一般医療従事者～



(3) 医療者を対象とした研修・ワークショップ「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」における参加者のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査回収率は 34/38 (88.2%) であった。

チャイルドサポートの必要性の認識(図5)としては、「ワークショップ前に比べてチャイルドサポートの必要性をより感じるようになったか？」との問いに対して、「とてもそう思う」30名(88.2%)、「まあまあそう思う」4名(11.8%)であった。

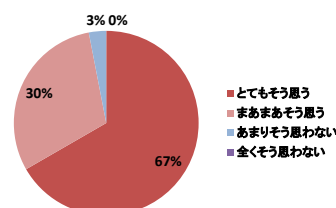
(図5)チャイルドサポートの必要性の認識
「ワークショップ前と比べてチャイルドケアの必要性をより感じるようになりましたか？」



ポートに関する取り組みの参考になったか？」との問いに対して、「とてもそう思う」22名(64.7%)、「まあまあそう思う」10名(29.4%)であった。

(図6)研修・ワークショップの意義

「ご自身あるいは自施設で実施可能なチャイルドケアに関する取り組みへの参考になりましたか？」



II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援

がんになった親をもつ子ども（小学生）に対する認知行動療法に基づく心理教育プログラム「夏休みキッズ探検隊」の開催とアンケート調査

(1) 平成 24 年 8 月 7 日開催

【子どもの背景】がんの親をもつ小学生の子ども 13 名/10 家族（患者数）/きょうだい 3 組、男児 6 名：女児 7 名、1 年 1 名：2 年 2 名：3 年 2 名：4 年 3 名：5 年 1 名：6 年 3 名であった。

【親の背景】患者は全員母親、乳癌 11 名：大腸癌 1 名：子宮癌 1 名、初発 7 名：転移・再発 6 名であった。

13 名/13 名回答（回収率 100%）

子どものイベント評価

4 段階評定（はい：4、まあまあ：3、あんまり：2、いいえ：1）として平均 3.7 以上だったのは、「またこんなイベントに参加してみたい」（4.0）、「これから

お母さんやお父さんと話がしやすくなると思う」(3.9)、「キッズ探検隊で知り合った友達にまた会いたい」(3.8)、「自分の体を大事にしようと思った」(3.8)、「ほかの友だちの話聞くことができた」(3.8)、「病院に対する不安や怖さが減った」(3.8)、「病院の食事の大切さを知ることができた」(3.8)、「がんの特徴や治療を知ることができた」(3.9)、「キッズ探検隊に参加してよかった」(4.0)、であった。

イベント前後の子どもへの負担の変化

減少した：8名、評価困難（有効回答外）：2名（ $p < 0.05$ ）

項目別変化として低減率 30%を示したのは、「何か悪いことがおきると心配になる」、「できなかったことや失敗したことをくよくよ考える」、「何でも完全にしっかりやらないとだめだと考える」、「お母さんの病気は自分のせいだと考える」、「自分もがんになると心配になる」、「生き物や人間が死ぬことを考えて怖くなる」、「いつもどこか緊張している」、「自分には良いところがある」、の項目であった。

親のイベント評価

4段階評定（とてもそう思う：4、まあまあそう思う：3、あまりそう思わない：2、全くそう思わない：1）として平均 3.7 以上だったのは、「今後もこのようなイベントに子どもを参加させたい」(3.7)、「子どものいるがんの友人や家族に勧めたい」(3.7)、「子どものいるがん患者の家族の安心に役立った」(3.7)、「このイベントにより子どもが成長したと感じる」(3.7)、「子どものがんに対する不安を和らげることにより役立った」(3.7)、「子どもの病院や医療に対するよい印象につながった」(3.9)、

「子どもががんについての知識を深めるのに役立った」(3.8)、「全体的に今回のイベントは良かった」(3.9)、であった。

(2) 平成 25 年 8 月 1 日開催

【子どもの背景】がんの親をもつ小学生の子ども 10 名/10 家族（患者数）、男児 6 名：女児 6 名（1 年 2 名、2 年 1 名、5 年 5 名、6 年 2 名）であった。

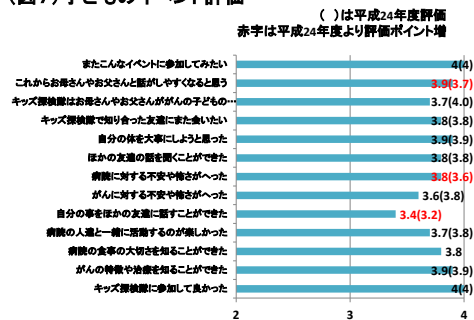
【親の背景】患者は父親 2 名：母親 8 名（乳癌 7 名、胃癌 1 名、甲状腺癌 1 名、血液癌 1 名）であった。

10 名/10 名回答（回収率 100%）

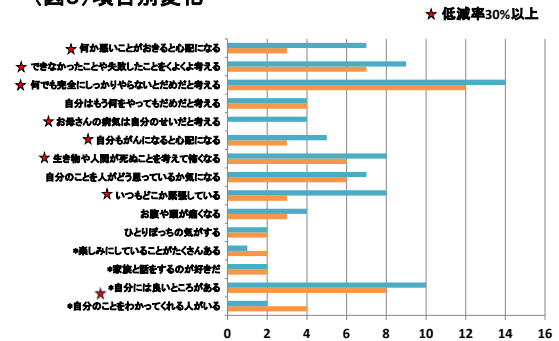
子どものイベント評価（図 7）

4 段階評定（はい：4、まあまあ：3、あんまり：2、いいえ：1）として平均 3.7 以上だったのは、「またこんなイベントに参加してみたい」(4.0)、「これからお母さんやお父さんと話がしやすくなると思う」(3.9)、「キッズ探検隊で知り合った友達にまた会いたい」(3.8)、「自分の体を大事にしようと思った」(3.8)、「ほかの友だちの話聞くことができた」(3.8)、「病院に対する不安や怖さが減った」(3.8)、「病院の食事の大切さを知ることができた」(3.8)、「がんの特徴や治療を知ることができた」(3.9)、「キッズ探検隊に参加してよかった」(4.0)、であった。

(図7)子どものイベント評価



(図9)項目別変化



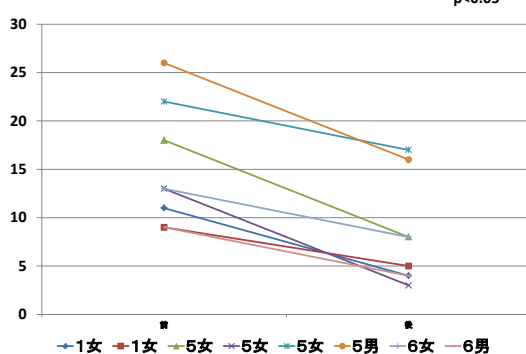
イベント前後の子どもの負荷の変化

(図8、9)

減少した：8名、評価困難（有効回答外）：2名 (p<0.05)

項目別変化として低減率 30%を示したのは、「何か悪いことがおきると心配になる」、「できなかったことや失敗したことをくよくよ考える」、「何でも完全にしっかりやらないとだめだと考える」、「お母さんの病気は自分のせいだと考える」、「自分もがんになると心配になる」、「生き物や人間が死ぬことを考えて怖くなる」、「いつもどこか緊張している」、「自分には良いところがある」、の項目であった。

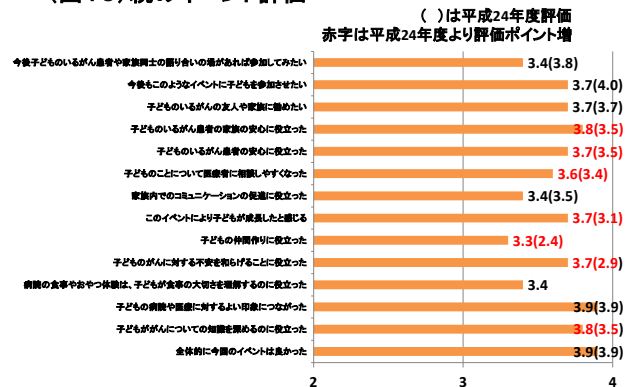
(図8)子どものストレス変化



親のイベント評価 (図10)

4段階評定（とてもそう思う：4、まあまあそう思う：3、あまりそう思わない：2、全くそう思わない：1）として平均3.7以上だったのは、「今後もこのようなイベントに子どもを参加させたい」(3.7)、「子どものいるがんの友人や家族に勧めたい」(3.7)、「子どものいるがん患者の家族の安心に役立った」(3.7)、「このイベントにより子どもが成長したと感じる」(3.7)、「子どものがんに対する不安を和らげることに役立った」(3.7)、「子どもの病院や医療に対するよい印象につながった」(3.9)、「子どもががんについての知識を深めるのに役立った」(3.8)、「全体的に今回のイベントは良かった」(3.9)、であった。

(図10)親のイベント評価



Ⅲ. 地域への情報発信

(1) 平成 24 年 1 月 14 日市民公開講座「子どものいのち 親のいのち～がん患者・家族を支える～」開催

アンケート回答者 68 名/来場者 100 名 (68.0%) であった。

子どもに病気について話す必要性 については、市民公開講座参加前では「必要」「とても必要」と答えたのは 54 名 (79.5%)、参加後は 59 名 (86.8%) となった。

医療関係者からのチャイルドサポート について「必要」「とても必要」としたのは 59 名 (86.7%) であった。

(2) 平成 25 年 1 月 12 日市民公開講座「がん患者の子育て支援～家族みんなの笑顔のために～」開催

アンケート回答者 84 名/来場者 142 名 (全体の回答率 59.1%、ただし設問によって回答者数が若干異なる)

子どもに病気について話す必要性 については、市民公開講座参加前では「必要」「とても必要」と答えたのは、71 名 (91%)、参加後は 79 名 (100%) となった。

医療関係者からのチャイルドサポート について「必要」「とても必要」としたのは 78 名 (100%) であった。

教育関係者からのサポートについて「必要」「とても必要」としたのは 78 名 (100%)、保健・福祉関係者からのサポートについて「必要」「とても必要」76 名 (97%) であった。

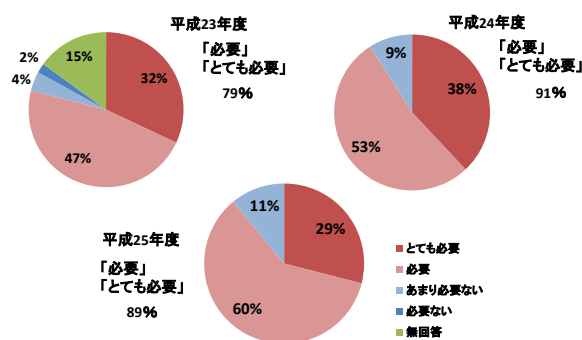
(3) 平成 26 年 1 月 11 日市民公開講座「つながるいのち～がん医療の現場から～」開催

アンケート回答者 121 名/来場者 221 名 (全体の回答率 54.8%、ただし設問によって回答者数が若干異なる)

子どもに病気について話す必要性 については、市民公開講座参加前では「必要」「とても必要」と答えたのは 88 名 (98.9%)、参加後は 89 名 (100%) となった。(図 11) 医療関係者からのチャイルドサポート について「必要」「とても必要」としたのは 97 名 (97.0%) であった。

教育関係者からのサポートについて「必要」「とても必要」としたのは 98% (97.0%)、保健・福祉関係者からのサポートについて「必要」「とても必要」97 名 (96.0%) であった。

(図 11)「子どもに病気について話す必要性」～市民公開講座前の参加者の認識～



D. 考察

I. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援

がん専門病院である当院職員のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査においては、がんになった親をもつ子どもに対する関心は高く、また、親の病期や子どもの年齢にかかわらず、子どもに対する心理的支援の必要性が認識されていた。また、子どもに対する介入の実際において

は、医師は患者とその子どもに対してより直接的にアプローチする傾向がみられたが、看護師はそれに加えて、家族や他職種・他部門と協力して介入を行おうとする傾向がより強くみられた。また、子どもの支援のために必要な資源としては、医師は本やパンフレット、資料などのツールを希望しており、看護師やその他の職種は、加えて実践的な演習、事例検討、支援場面の見学を希望する傾向がみられた。

この結果をもとに医療者（特に看護師）を対象として開催した研修・ワークショップ「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」における参加者のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査では、参加者の8割以上の参加者がチャイルドケアについては初めての受講であったが、ワークショップの前後で、がん医療における子どもの心理、行動に対する理解が深まっており、その必要性、理解については参加者の全員に行き渡ったと考えられた。また、32名（94%）が「自施設で実施可能なチャイルドケアに関する取り組みの参考になる」としており、臨床現場のニーズに即した内容であったことが推察される。今後も県内の拠点病院や県内小児科病棟をもつスタッフに対して、ケース検討会、勉強会など、チャイルドケアをテーマとした継続的な医療者支援が必要だと言える。

II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援

がんになった親をもつ子ども（小学生）に対する認知行動療法に基づく心理教育プログラム「夏休みキッズ探検隊」の開催と

アンケート調査結果より、子どもについては、平成24年8月および平成25年8月開催のいずれのほとんどの項目で高い評価を得ており、また、イベント介入前後の子どもストレスについても有意に軽減されており、イベントの目的の1つであった「病気や病院について正しく学ぶことにより不安が軽減され、レジリエンスが引き出される」については、ほぼ達成されたと考えられた。

親の評価は、両年ともに子どもに比して低かったものの、「全体的に今回のイベントは良かった」との評価を得た。上記の子どもの評価と同様に、親も「子どもが成長したと感じる」「子どものがんに対する不安を和らげることに役立った」と感じており、「子どものいるがん患者の安心に役立った」との評価に結び付いたものと考えられる。

参加した子ども同士が話をする機会が少ない点などを含め、内容の検討しながら今後も継続開催が予定されている。また、がんの親をもたない一般児童についても、がん教育の一環として今後開催することも予定されており、その効果が期待される。

III. 地域への情報発信

平成24年1月市民公開講座「子どものいのち 親のいのち～がん患者・家族を支える～」（来場者100名）、平成25年1月市民公開講座「がん患者の子育て支援～家族みんなの笑顔のために～」（来場者142名）、平成26年1月市民公開講座「つながるいのち～がん医療の現場から～」（来場者221名）と、年々来場者数は増加し、市民公開講座参加後にはもちろんだが、市民公開講座参加前でも子どもに病気について話す必要性について「必要ない」とする

回答はみられなくなった。医療者からのチャイルドサポートの他、教育関係者や保健・福祉関係者からのサポートについても必要との認識は依然高かった。

市民公開講座開催は、がんになった親をもつ子どもへのサポートに対する地域住民の認識を把握すること、がん医療における子どもの現状やそのサポートの必要性を含めた情報発信に効果的であったと考えられ、今後も継続開催が望まれるところである。

以上より、がんになった(子育て世代の)「親」およびその「子ども」を含む「家族」に対して、診断・治療期からの継続的なサポートの提供が必要であると考えられ、その実現のためには、院内においては今後も多職種でのカンファレンスや勉強会での情報共有と啓蒙を進めていく必要があると考えられた。また、そのような支援について病院など一機関(施設)ができることはほんのわずかであるため、教育機関や地域保健機関やなどを含めた様々な立場の資源と連携し支援できる体制の整備が必要であると考えられ、今後は、特に教育関係者や保健・福祉関係者を含めた地域住民に対して広く情報発信し、協力体制を構築していく必要があると思われた。

がん診療連携拠点病院として、今後も患者・家族および医療関係者、地域へのサポートの提供および情報発信を行い、院内、院外、地域が協働して、がんになった「親」をおよびその「子ども」を含む「家族」を支えるしくみ作りをさらに推進したい。

E. 結論

がん患者の子どもへのサポートの拡充の

ため、Ⅰ. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援、Ⅱ. 患者(親)および子どもを含めた家族の支援、Ⅲ. 地域への情報発信、の大きく3つの側面から活動を展開してきた。がんになった(子育て世代の)「親」およびその「子ども」を含む「家族」に対して、診断・治療期からの継続的なサポートの提供が必要であるが、病院など一機関(施設)ができることは限られているため、今後も患者・家族および医療関係者、地域へのサポートの提供および情報発信を行い、院内、院外、地域が協働して、がんになった「親」をおよびその「子ども」を含む「家族」を支えるしくみ作りをさらに推進したい。

F. 研究発表

1. 論文発表

該当なし

2. 学会発表

- 1) 井上実穂、谷水正人、菊内由貴、成本勝広、長尾美恵子:「親と死別する子どもへの心理的支援～子ども面接から見えてくるもの」第16回日本緩和医療学会学術大会. 平成23年7月30日. 北海道札幌市
- 2) 大沢かおり、井上実穂、小林真理子、石田也寸志、小澤美和、真部淳:「がんになった患者の子どもへの病気説明に関する実態調査—その1 患者へのアンケート・量的分析」第16回日本緩和医療学会学術大会. 平成23年7月30日. 北海道札幌市
- 3) 村瀬有紀子、井上実穂、茶園美香、大沢かおり、井上絵未、衛藤美穂、小林真理子、三浦絵莉子 小澤美和 石田

- 也寸志、真部淳：「がんになった患者の子どもへの病気説明に関する実態調査—その2　がん患者が病気を子どもに説明する背景」第16回日本緩和医療学会学術大会，平成23年7月30日，北海道札幌市
- 4) 井上絵美、村瀬有紀子、井上実穂、茶園美香、大沢かおり、衛藤美穂、小林真理子、三浦絵莉子、小澤美和、石田也寸志、真部淳：「がんになった患者の子どもへの病気説明に関する実態調査—その3　説明を受けた子どもの反応」第16回日本緩和医療学会学術大会，平成23年7月30日，北海道札幌市
- 5) 井上実穂：「親が終末期がん患者である子どものこころとその支援～親を看取る子どもを支える」第30回日本心理臨床学会総会秋季大会，平成23年9月2日，福岡県福岡市
- 6) 井上実穂、谷水正人、菊内由貴、増田春菜：「親ががんになったときの子どもへの関わり　中学生保護者の意識」第24回日本サイコオンコロジー学会総会，平成23年9月29日，埼玉県埼玉市
- 7) 清藤佐知子、井上実穂、菊内由貴、増田春菜、谷水正人：「親ががん患者である子どもに対する多職種チームによる取り組み」第49回日本癌治療学会学術集会，平成23年10月28日，愛知県名古屋市
- 8) 井上実穂：「親ががん患者である子どもを支える～子どもに病状を伝えるということ～」第13回四国死の臨床研究会／第23回愛媛緩和ケア研究会，平成24年6月16日，愛媛県松山市
- 9) 井上実穂、菊内由貴、清藤佐知子：「がんを家族にどう伝えるか　多職種によるチャイルドケアプロジェクト～子どもを抱える患者家族を支える～」第17回日本緩和医療学会学術大会，平成24年年6月22日，兵庫県神戸市
- 10) 清藤佐知子、井上実穂、菊内由貴、谷水正人：「がんになった親をもつ子どもに対する支援（1）～医療者の意識調査～」第25回日本サイコオンコロジー学会総会，平成24年9月21日，福岡県福岡市
- 11) 井上実穂、清藤佐知子：「がんになった親をもつ子どもに対する支援（2）～母親が治療中である子どもへの関わり～」第25回日本サイコオンコロジー学会総会，平成24年9月21日，福岡県福岡市
- 12) 井上実穂、菊内由貴、清藤佐知子、村上琴映、兵頭静恵、福島美幸、佐伯京子、島田みちる、谷水正人：「がんになった親をもつ子どもに対する支援（3）～チャイルドケアプロジェクト『夏休みキッズ探険隊』」第25回日本サイコオンコロジー学会総会，平成24年9月21日，福岡県福岡市
- 13) 清藤佐知子、井上実穂、菊内由貴、谷水正人：「がんになった親をもつ子どもに対する支援（1）～アンケート調査結果を踏まえて～」第50回日本癌治療学会学術集会，平成24年10月26日，神奈川県横浜市
- 14) 清藤佐知子、井上実穂、谷水正人：「がんになった親をもつ子どもに対する取り組み～チャイルドケアプロジ

ェクト〜」第56回 愛媛乳癌疾患懇話会. 平成25年5月11日. 愛媛県松山市

- 15) 井上実穂、清藤佐知子、菊内由貴、谷水正人:「親ががん患者である子どもへの支援〜チャイルドケアプロジェクトの効果検証(1)〜」第18回 日本緩和医療学術大会

平成25年6月22日. 神奈川県横浜市

- 16) 清藤佐知子:「がんになった親をもつ子どもに対する取り組み:チャイルドケアプロ

ジェクト〜治療期からのトータルケア〜」第21回 日本乳癌学会学術総会.

平成25年

6月27日. 静岡県浜松市

- 17) 井上実穂、谷水正人:「親ががん患者である子どもへの心理教育プログラム『キッズ探検隊』の開発」第13回日本認知療法学会. 平成25年8月23日. 東京都豊島区

- 18) 清藤佐知子、井上実穂:「『子育て世代のがん患者』の支援〜チャイルドケアプロジェクト〜」. 第51回 日本癌治療学会学術集会. 平成25年10月25日. 京都府京都市

- 19) 井上実穂、宮内一恵、谷水正人:「院内全体で取り組むがん患者・家族への支援 チャイルドケアプロジェクト『夏休みキッズ探検隊』」第67回国立病院総合医学会. 平成25年11月9日. 石川県金沢市

3. その他の発表

講演

- 1) 井上実穂:「親ががん患者である子

どものころとその支援」リレーフォーライフ 2001 in えひめ. 平成23年10月9日. 愛媛県松山市

- 2) 井上実穂:療育が必要な子どもたちと保育「親が病気である子どものころとその支援〜トラウマにさせないために」第17回日本保育保健学会. 平成23年11月12日. 岡山県岡山市

- 3) 井上実穂、谷水正人、菊内由貴、清藤佐知子、増田春菜:「四国がんセンター チャイルドケアプロジェクト」. 厚生労働科学研究(がん臨床研究事業)推進事業:市民公開講座『小児がん患者・家族及び子育て世代のがん患者家族への支援を考える』. 平成23年12月23日. 東京都中央区

- 4) 井上実穂:「がん診療におけるチャイルドサポート 親を看取る子どもを支える ~終末期医療の現場から~」愛媛県がん診療拠点病院連絡協議会. 平成24年1月13日. 愛媛県松山市

- 5) 井上実穂:「親ががん患者である子どものころとその支援」厚生労働科学研究(がん臨床研究事業)推進事業:市民公開講座『子どものいのち 親のいのち〜がん患者・家族を支える〜』平成24年1月14日. 愛媛県松山市

- 6) 清藤佐知子:「子どものために親ができること〜乳がん検診の意義〜」厚生労働科学研究(がん臨床研究事業)推進事業:市民公開講座『子どものいのち 親のいのち〜がん患者・家族を支える〜』平成24年1月14日. 愛媛県松山市

- 7) 井上実穂:「親ががん患者である子どものころとその支援」平成24年5

- 月 13 日. 愛媛県松山市
- 8) 井上実穂 : 「親ががん患者である子どものこころとその支援」平成 24 年 5 月 13 日. 愛媛県松山市
- 9) 井上実穂 : 「がん患者家族支援～親ががん患者である子どもを支える～」. 平成 24 年 9 月 13 日. 愛媛県松山市
- 1 0) 井上実穂、谷水正人、菊内由貴、清藤佐知子、増田春菜 : 「親をがんで亡くす子どもの臨終前後のケ」. 厚生労働科学研究 (がん臨床研究事業) 推進事業 : 市民公開講座. 平成 23 年 12 月 22 日. 東京都中央区
- 1 1) 井上実穂 : 「親ががん患者である子どものこころとその支援～病院での取り組み～」 厚生労働科学研究 (がん臨床研究事業) 推進事業 : 市民公開講座『がん患者の子育て支援～家族みんなの笑顔のために～』平成 25 年 1 月 12 日. 愛媛県松山市
- 1 2) 清藤佐知子 : 「乳がんとともに生きる」 厚生労働科学研究 (がん臨床研究事業) 推進事業 : 市民公開講座『がん患者の子育て支援～家族みんなの笑顔のために～』平成 25 年 1 月 12 日. 愛媛県松山市
- 1 3) 井上実穂 : 「親ががん患者である子どものこころとその支援」平成 25 年 3 月 7 日. 愛知県安城市
- 1 4) 井上実穂 : 「親ががん患者である子どものこころとその支援」平成 25 年 8 月 23 日. 高知県高知市
- 1 5) 井上実穂 : 「乳がん患者と家族を多職種で支える チャイルドケアプロジェクトの取り組み」平成 25 年 11 月 16 日. 愛媛県松山市
- 1 6) 井上実穂 : 「親ががん患者である子どもの心とその支援～子どもに病気をどう伝えるか」平成 25 年 12 月 14 日. 鳥取県鳥取市
- 1 7) 井上実穂 : 「親ががんになったときの子どものサポート 拠点病院としての地域医療・教育機関との連携」 厚生労働科学研究 (がん臨床研究事業) 推進事業 : 市民公開講座. 平成 25 年 12 月 21 日. 東京都中央区.
- 1 8) 井上実穂 : 「大切な人をなくした子どもたちを支える～心を癒す絵本の紹介～」 厚生労働科学研究 (がん臨床研究事業) 推進事業 : 市民公開講座『つながるいのち～がん医療の現場から～』平成 26 年 1 月 11 日. 愛媛県松山市
- 1 9) 井上実穂 : 「親を看取る子どもへの支援～チームで支えるチャイルドケアプロジェクト～」平成 26 年 2 月 14 日. 徳島県徳島市
- その他
- 1) 院内パンフレット作成 : 四国がんセンター チャイルドケアプロジェクト 「より安心して生活を送るために・・・お父さんがいらっしゃる患者さん・ご家族へ」
- 2) Hope tree フォーラム 2011 「子どもが大切な人と別れる時、私たちにできること～終末期がん患者・家族を支える～」 運営スタッフ : 平成 23 年 7 月 10 日. 岡山県岡山市、国際交流センター
- 3) m3.Com 学会レポート. 第 49 回日本癌治療学会学術集会ミニシンポジウム 「親が癌の子ども支援体制をー今年の

春に、多職種で構成された Child Care Project を発足ー」m3.平成 23 年 11 月 28 日

- 4) 日本サイコオンコロジー学会ニューズレター第 71 号(平成 23 年 11 月発行)施設紹介「四国がんセンター チャイルドケアプロジェクト」のご紹介. 日本サイコオンコロジー学会ニューズレター第 71 号 (平成 23 年 11 月発行)
- 5) 医療関係者を対象とした講演会「がん診療におけるチャイルドケア～親ががん患者である子どものサポート～』開催：平成 24 年 1 月 13 日. 愛媛県松山市、四国がんセンター
- 6) 市民公開講座『子どものいのち親のいのち～がん患者・家族を支える～』開催：平成 24 年 1 月 14 日. 愛媛県松山市、愛媛県生涯学習センター
- 8) 「夏休みキッズ探検隊」開催：平成 24 年 8 月 7 日. 愛媛県松山市、四国がんセンター
- 9) 市民公開講座『がん患者の子育て支援～家族みんなの笑顔のために～』開催：平成 25 年 1 月 12 日. 愛媛県松山市、松山市総合コミュニティセンター
- 10) 医療関係者を対象とした研修・ワークショップ『看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～』開催：平成 25 年 6 月 9 日. 愛媛県松山市、四国がんセンター
- 11) 「夏休みキッズ探検隊」開催：平成 25 年 8 月 1 日. 愛媛県松山市、四国がんセンター
- 12) 市民公開講座『つながるいのち～

がん医療の現場から～』開催：平成 26 年 1 月 11 日. 愛媛県松山市、松山市総合コミュニティセンター

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
該当なし
2. 実用新案登録
該当無し
3. その他
該当なし